

## 来賓挨拶

高知女子大学学長 池川 順子

皆さんこんにちは。私が皆さんの看護学会に御挨拶に来るようになりまして、今日が6回目でございますが、今日は特に盛会ではないかと、そういう感じが致します。

今日は8時15分に、私は北の方を向いて黙禱をしてきたのでございますが、広島に原爆が投下されて50年めの8月6日ということです。そして3日後の9日が長崎ですが、その1日前のあさって、8月の8日、これはソ連が日本に参戦してきた日でございますが高知女子大学創立50年のルーツの日です。今年戦後50年と言われておりますけれども女子大50年でもあり、いくつかのイベントも計画しています。

この高知女子大学の創立をいつにとるかということで、色々議論したのでございますが、やはりそのルーツは、高知県立女子医学専門学校です。これがもう本当に戦前の混乱期でございまして、文部省の許可を得て開学に至る迄に空襲があったり、特に7月4日の高知大空襲があったりというような事で、非常に開学が延びまして、8月8日のあさってが50年になるのですが、高知女子医学専門学校の開学式と、そして第1回の入学式をやったのです。ここにルーツをとろうということで計画しているのでございます。

その後、高知県立女子専門学校、高知女子大学とずっと引き継がれていくのです。この女子医学専門学校を、終戦の一週間前に、男の医者と同じ女の医者を養成するという事で、戦争目的でございまして開学させた、これは勿論その後すぐ日本は敗戦になって、医専も廃学になっていくのですが、これがルーツにあるということは注目すべきです。その後平和社会がきて、全く目的も理念も違う、形も違う教育機関に衣替えをしていくのですが、私はその後戦後50年の社会の中で、男と同じ職業を持つ女性を育成する、ということで設立された医学専門学校の精神というものが、何故か生きているのではないかと、つまり働く女性の育成というものに受け継がれていっている気がします。それからもう一つ、その伝統が受け継がれるということは、この医専が廃学になりまして、女子専門学校ができ、この第1回生が私でございますが、昭和22年ですけれども戦後の解放期、憲法が施行になる1ヵ月前でございます。この戦後の解放期に第2の高知女子大学の創草期があったということは、これは本当にその後の高知女子大学、女性の地位の向上という、言葉にすれば平凡なことになりますけれども、本学の背骨を作っていく非常に大きな影響を与えていったというように思うのでございます。皆さんは看護の卒業生です。新制という言葉も古くなりましたが、新制大学の女子大学の卒業生でいらっしゃるのですけれども、戦史時代に学生であった、また、学長として創立50年を取り組んでいる立場で、そういう大学のささやかな成り立ちのところをお話申し上げて、職業に生き、研究に生きていられる皆さん方のルーツというものも、知って頂きたいと思つた次第です。

先程、山崎会長の御挨拶にございましたけれども、本当にどうなることかと思ひながら、やっと高知女子大学看護学部への取り組みが具体化してくる、という段階にきております。今、状況が進んでおります。設計業者の決定も行われたばかりで、そういうほやほやですけれども進みまして、看護の先生方は方眼紙に必要な施設など

を書き込むというような段階にきております。これはもう物的、人的、こういう先生たち、それから施設、設備  
こういうものを集めるという、今大変な忙しい時でございますけれども頑張っておられます。一方、看護  
の方達、先生、それから卒業生、この方々を中心に公開講座などが持たれまして、やはり高知女子大学の看護と  
いうのは、日本で一番歴史のある4年生大学の看護だという実績を示して下さっております。皆さんどうかこれか  
らの高知女子大学の看護を支えて下さるようお願い申します。そして地域でのますますのご活躍をご期待いたし  
ます。今回の会が御盛会でありますように願って御挨拶と致します。ありがとうございました。